

八重賞『揺るがない信念をもつ』 喜多村 彩未

私は10歳の時、カンボジアに行く機会があった。そこである男の子に出会った。その子は鳩の餌を大量に載せたカートを引いて観光客に売っていた。おそらくその子は、私と同年くらいだったと思う。日本では見たことのない光景にとても驚いた。それを買ってあげたほうがいいのか、でも同世代の子供から買ってもらうことが嫌なのではないか。私はいろいろと考えすぎて、結局ただ見ているだけで何もできなかった。今もこの光景を鮮明に思い出すことがある。一人が何かをしても何も変わらない、変わったとしてもほんの少しだとか誰の役にも立たないだとか思ってしまう自分がいたのかも知れない。

「主よ、今日一日、貧しい人や病んでいる人を助けるために、私の手をお望みでしたら、今日、私の手をお使ください」これは私が中学に入学して学んだマザーテレサをもとにして作られたお祈りであり、聖歌にもある言葉である。私は勉強、部活動、友人関係のことで行き詰まった時に、一度立ち止まり、この言葉を思い出すようにしている。人は誰かのために何かをすることが恥ずかしいと思う気持ちを抱くことがあるだろう。しかしそれは結局、自分のことしか考えていない。私があの時何もできなかったのは周囲の目を気にして、恥ずかしいという感情があったからだと思える。何が何でも成し遂げたいという強い信念があれば、そもそも恥ずかしさは生まれない。

新島八重氏の自分の信念を貫く「行動力」は今の私にとって一番必要なことだ。新島八重氏の言葉でこのようなものがある。「どんなに波が荒く強くても、心の岩は決して動きません」どんなに過酷な試練があっても強い信念さえあれば乗り越えられるという意味だ。新島八重氏が生きた時代に何かを成し遂げるということは今の時代よりはるかに難しいことだったと思う。ましてや「男尊女卑」という考え方が色濃く残る時代に、女性が男性と同じ立場に立つということは誰にでもできることではない。新島八重氏の信念そのものが自身を動かしたのだろう。私はそのような新島八重氏の「行動力」を尊敬すると同時に強い憧れを抱いた。

私は固定観念にとらわれず、柔軟な考えを持って世界を捉え、その場の状況に応じて最善の行動ができる人になりたい。私は将来、自衛官を目指している。世界中の紛争や戦争が起こっている地域で、1番の被害者となる子供たちを守ることができる職務に就きたい。国の防衛や災害救助活動はもちろん、国外での平和維持活動のために今は英語の勉強に力を入れている。言語を駆使して国際理解を深め、問題を考察し、世界と地域を結び付けて考えることが大切だと思う。

今年3月に同志社大学の今出川キャンパスを訪れた時に、壮大なキャンパスに足を踏み入れて鳥肌が立った。新島夫妻の計り知れない苦難や努力を絶対に忘れてはいけない。その実感をもって今は、心が奮い立つ思いである。